

中学一年生のミシンの取扱いとぬい方の指導について

金 田 ト シ 子

I 研究の意図

小学校の学習指導要領によると「6年生でぬうことができるようになる」とあって、当然ミシン操作や簡単な製作はできなければならないことになっているのであるが、私が今年度入学した本校の1年生の女子37名について調べてみた結果は表1のようで、ミシンを扱うことができる、ぬうことができる、というものは僅か6名、全体の16%だけであって、残りの31名、84%にあたるものはミシンの操作が全然できないと答えている。そのうえその31名のうちの12名33%、全体の1/3がミシンについては全然わからないと答えている現状であります。こうした生徒に中学校の指導要領が示すようなブラウスやスカートの製作にすぐ入るわけにはいかず、当然小学校でやってきていなければならないミシンの各部の名称や基礎操作から教えなければならないことになり、時間的にも相当な無駄を生じてきます。

表1 今年度入学の中1の女子は小学校においてミシンをどの程度扱ってきたか

ミシンを扱うことができる (ぬうことができる)	6名	16%
ミシンの操作が全然できない	31名	84%
計	37名	

(注) 扱うことができると答えた6名のうち2名は実際には扱うことが出来なかった。

そこでこうした生徒に最も基礎的なミシン操作やぬい方の指導をする場合にぶつかる最初の困難点は、実際に糸をつけて布をぬう場合に起ってくる。それは今まで糸をつけないでカラぶみで練習してきて、いよいよ糸をつけて布をぬう時になってうまくぬえないということで、うまくぬえないというのはいろいろな場合が考えられますが、ここで問題にしようとするのは、布の送り方のコツがわからないためにうまくぬえないものに、どうやってその方法を覚えさせるかということなのであります。この布の送り方のコツがわからないというのは、一つには布をおさえすぎるために布が

すすまない場合、逆転して糸がからんでぬえなくなってしまうという場合、つぎには手で布をひっぱりすぎのために布が早くおくられてしまい、極端な時には針が折れてぬえなくなってしまうというような場合が考えられるのであります。

そこでこのような困難を何か適切な方法によって解消できないかと、いろいろ考えて実験してみたのが、今回の研究の意図であります。

II 研究の方法ならびに考察

まず糸をかけないでカラぶみによって逆回転しないようにふみ方を充分練習させ、次にいよいよ実際に布をつかってぬう練習になるのであるが、私は布をぬうことにはいる前に、次のような方法によって練習させてみました。

それはまず糸をかけないで布の代りに紙を使用して練習をさせてみました。布のかわりに紙を使用したわけは、紙はぬったあとがはっきりわかるということを利用したのであります。こうして練習しておけば、最初から布でぬわせるよりも、より効果的にぬい方のコツが覚えられるのではないかと考えたのであります。そこでこの練習に使用した紙はできるだけ布の性質に近いものでなければ、紙はぬえても布はぬえないということになって、その目的を達することができないので実験的に次のようにいろいろやってみたのであります。

それは、あらかじめ使用させる紙に直線や曲線を印刷しておき、糸をつけないでその印刷された線の上をカラぬいさせ、そのぬい目が印刷された線の上をぬっているかどうかをしらべさせながら、印刷された線のとうりにぬえるように練習させるのであります。

そうしてそれができるようになったら線をつけた布をぬわしてみるという方法であります。

まず第1にザラ紙やハترون紙を使用してみたのでありますが、この場合は少しの手の力のちがいや送り金が高すぎた場合に、すぐに紙がやぶれてしまっって練習にならないという結果になりました。

そこで第2の方法として厚い紙を使えばよいと考え

中学一年生のミシンの取扱いとぬい方の指導について

て画用紙を使用させてみました。この場合は紙質が厚いので第1の方法のように破れるということはなかったけれども、布とは全然感じがちがうのでぬう練習はよくできても布にかえた場合に紙と布との感じが余りちがすぎるためにはじめに意図したような結果をみることができず、紙はぬえても布はぬえないという結果になり、紙を使用した場合と直接布でぬわせた場合と余り差がないということが認められました。こうしてはじめのねらいは全然失敗におわり、そのうえ紙の使用は紙のくずが機械の釜の中に入って機械の調子をくるわせてしまう結果となってしまったのであります。

そこでいままでに行った二つの実験から得た反省をもととして、次のような第3の方法を考えてみました。それは前と同様に線を印刷した和紙の裏に同じ大きさのもめんを二枚重ねて四方をとじたものを使用させることであります。この結果は先の場合のように紙が破れたり、釜をよごしたりすることもなく、使用の感じも布と余り変らないために結果的には大体所期の目的を達することが出来たように考えております。その結果は表2に示すようで何の障害もなくすぐにぬうことができるようになったものが37名中33名、89%という割合で紙から布への転換が比較的容易にできたのであります。

又紙を使用するこの方法に対する生徒の反応は、この方法で練習してよかったというものが表3に示すよ

うに37名中32名、86%を示しているのであります。

これによって第3の方法で、私が最初に考えたミシンのカラぶみから布をぬうことへの転移が比較的スムーズに移行させ得るのではないかと考えるのであります。

表2 和紙に布を裏打ちしたぬい方に対する生徒の反省

何んの障害もなくすぐぬうことができるようになった	33名	89%
この方法によってもうまくぬえるようにならなかった	4名	11%
計	37名	

表3 和紙に布をうらうちした方法と画用紙を使用した方法とに対する生徒の反省

和紙にうらうちした方法のほうがよい	32名	86%
画用紙のほうがよい	5名	14%
計	37名	

Ⅲ 研究結果の反省

ミシンの初歩的なぬい方の指導を私が実際に行った結果について申しあげましたが、何分にも不十分な研究でありますので、それぞれの学校や生徒の状態によっていろいろな指導法が研究されていることと思っておりますので、よろしく御批判が頂けたら大変ありがたいと思っております。